

庄野潤三の聞き書き小説「紺野機業場」論

——『徒然草』との関連性を踏まえて——

村手元樹

一
はじめに

ある人間を描くことを目的とする小説がある。また人間を将棋の駒のように使って作者の考えを伝える小説もある。しかしこの作品はそのどちらでもなく、「話」が主人公である。「話」のはなしであるという点が、「紺野機業場」の小説としての新しさだと思う。

ではどんな話か。その特徴を一口に言うとな「脱線また脱線」の面白さである。

(阪田寛夫「脱線また脱線の面白さ」(サンケイ新聞、昭44・12・28))

庄野潤三の「紺野機業場」は風変わりで散漫な物語である。庄野の小説は、いったいに物語といったほどの構成をもたず、そこに描かれる些末な日常事を通じて、日常を越えた、人生の奥深い事実を暗示するのが常であるが、この作品はもはや物語といったわくをさえもはずしている。

(瀬沼茂樹「風変わりで散漫——日本人の根」探り新実験(信濃毎日新聞、昭44・12・17))

庄野潤三の「紺野機業場」は、昭和四十四年、『群像』九月号に発表され、同年十一月に講談社より単行本化された。語り手である「私」が石川県の安宅町を訪れ、そこで小さな織物工場を経営する紺野友次氏から彼や彼の周りの人に関する話を聞くという「聞き書き」の小説である。単行本の刊行に際して新聞に掲載された、この二つの書評からも覗えるように、この小説の形式の特異性が驚きを持って迎えられた。日常の断片を並べる庄野のスタイルは承知しているものの、程度を逸脱し過ぎていることへの驚きである。確かに「紺野機業場」は庄野の手がけた「聞き書き小説」の中でも、その奔放さは群を抜いている。二つの書評はその思い切った形式に対する賛否両論を端的に示していると言えよう。

「紺野機業場」という小説を理解するための要点は一見「風変わりで散漫」な、この形式の解明にある。そこで本稿では、先ずこの大胆な挑戦とも言える形式に、庄野のどんな意図があったのか、またその効果がどのように表われているかを探る。その上で、この形式と深く関わっている内容面について考察していききたい。

その際、重要な補助線となるのが『徒然草』である。庄野は伊東静雄から『徒然草』を読むことを推奨され、小説を書く以前から愛読し、その強い影響を受けている。この概要については以前拙論「庄野潤三と徒然草」で詳しく考察した¹⁾。「紺野機業場」においても特にその形式面で『徒然草』の影響を強く受けていると考えられる。『徒然草』との関連性も踏まえながら、「紺野機業場」という小説の魅力を解き明かしていくこととする。

二 「聞き書き小説」と「聞く」志向

まず庄野の「聞き書き小説」が彼の中でどのような意味を持つ小説かについて大まかに確認しておこう。ここで言う「聞き書き小説」とは、庄野自身が地方の市井の人々に取材し、事実をもとにその人およびそれに関わる家族やコミュニティの人々の生活や人生を描いた小説のこととする。

最初の本格的な聞き書き小説と言える作品は『浮き燈台』（新潮社、昭36・9）である。志摩の安乗の海女や漁師に取材し、その生活を描いた聞き書き小説である。その創作について庄野は次のように語る。⁽²⁾

私は「静物」を書いたあと、雑巾をしぼるようにして自分をしぼり出す小説はかなわないと思い、今度は素材を外部に求めたいと考えていた。

阪田寛夫が庄野に聞いたところ⁽³⁾によると、アメリカのガンビアという小さな町に留学した時から「自分は日本の田舎のことを知らないから、こんど帰国したら田舎を訪ねてみよう」という思いを持っていたようである。庄野はロックフェラー財団の招きにより一年間の米国留学の機会を与えられる。庄野は「田舎の出来るだけ小さな町に行つて、その町の住民の一員のようにして暮らすことが出来たら」という希望を出し、昭和三十二年八月より約一年間アメリカのオハイオ州ガンビアに留学をした。その様子を『ガンビア滞在記』（中央公論社、昭34・3）に書いた。こうして日本の田舎への思いを抱きながらも、その次に取り掛かったのが「静物」（『群像』、昭35・6）である。庄野自身の生活をモデルにし、自分と向き合い、格闘の末、書き上げられた。

つまり「素材を外部に求め」とは、庄野が他者である地方の生活に目を向けるということである。しかし外部に移行したわけではない。この後も自分の生活と並行して聞き書き小説は書かれていく。このように庄野が一旦自分の外部に出ることは、自分の生活を客観的に見直す機会ともなり、自身の生活をモデルにした、「夕べの雲」（『日本経済新聞』、昭39・9〜昭40・1）のような新たな境地の家庭小説などへと繋がっていく。聞き書き小説は、庄野が自身の内部と外部を往復しながら日常を見つめる眼を深めていった場として捉えることができる。

『浮き燈台』は「紺野機業場」と比較すると整った構成となっている。都会で不如意な会社員生活を送っている「私」が海のそばの辺鄙な村のことを同僚から聞いて何故か心惹かれて訪れる。もと海女だった小安ばあさんの案内で、海女や漁師から昔話をいろいろと聞く。村での話と「私」の都会での話が交互に繰り返される。「私」は、失敗したり欺されたり、勤めや生活、母や兄との関係性などさまざまな心配を抱えながら不安定な生活を送っている。

村で聞く昔話は、難破船の話が中心である。この地域は波が荒く、昔からよく船が沈む。静かな生活の中に「死」が埋め込まれているのを感じさせる。こうした点は「静物」の世界観が投影されていることが覗える。

「流れ藻」(『新潮』、昭41・10)は千葉の若い夫婦への取材をもとにした聞き書き小説である。その取材の経緯について庄野は次のように語っている。知人が一緒に出掛けた妹夫婦の車とはぐれて困っていた際、木更津のドライブインで働く若い夫婦が親切にしてくれた。その話を知人から聞いて庄野は興味を掻き立てられ、取材することにした。以前から「若い夫婦の物語を書いてみたい」と思っていたからである。それも夫婦の出会いから書きたい、「どんな男女でも、何か運命といったもので一つに結びつけられるわけだが、その運命の不思議さ、といったものを、もし書くことが出来たら有り難い。運命といったら、大げさになるかもしれない。それなら、縁といてもいい。」「みんな、縁があつてこの世に生きているのである。その縁を書いてみたい。」しかも「その主人公というのは、私たちの身のまわりのどこにでも暮しているような、普通の人がいい。」と。こんなふうに漠然と思っていたところ、それにぴったりの夫婦が見つかった。戦争末期に海軍の予備学生として館山の砲術学校で過ごした房州という場所にも「縁」を感じた。取材を始めた時には鮎屋に転職していたが、そこから約半年、十回ほど千葉に通って夫婦に取材し、一年五ヵ月後に作品が完成したと言う。

友情に厚く行動力があるが、無茶をしがちな夫・近雄と、家族が平穏に暮らすことを望む妻・照代。日々の生活は波瀾に満ちている。「浮き燈台」や「流れ藻」の題名も象徴するように、聞き書き小説の通奏低音には「無常」「不定」の認識がある。登場人物やそれを取り巻く環境が移り変わっていく様を描くという基本的なコンセプトがある。「浮き燈台」では不定の世の物悲しさを感じさせるが、「流れ藻」ではむしろ不定を楽しむ姿を描いていることは注目値する。近雄は安定したサラリーマンの職をあっさり捨て、常に次の新しい商売のことを考える。

何か新しいものを覚えたい。新しいものを試みて、もし駄目だったら、それにへこたれるというのが嫌いで、あれが駄目ならこれで行くという切りかえをむしろ楽しみたい。また成功しなかったものでも、あとで方法をか

えて試みてみたい。

近雄はまさに流れ藻のような生き方を楽しんでいるのである。

「聞き書き小説」とまでは言えないものの、人から聞いた話をもとに創作する姿勢は初期の段階から庄野の根本的な姿勢としてあった。人の話に積極的に耳を傾け、アンテナを張り巡らす意識を持っていた。

例えば、初期の小説「流木」(『群像』、昭28・12)は、庄野が毎日ある人物から話を聞き、それを書き留めたノートをもとに創作した小説である⁽⁶⁾。また初期の代表作「プールサイド小景」(『群像』、昭29・12)は庄野が大阪の実家付近のプールで幸せそうに泳ぐ親子連れを見た後、その父親が実は会社の金を使い込んで解雇されていたという近所の噂を聞きつけて衝撃を受け、それを膨らませて書いた小説である⁽⁷⁾。

文学に対する、自らの姿勢を語る重要なエッセイ「自分の羽根」(『産経新聞』、昭34・1・13)は庄野の「聞く」志向の意図を顕著に表している。

私は自分の経験したことだけを書きたいと思う。徹底的にそうしたいと考える。但し、この経験は直接私がしたことを指すのではなくて、人から聞いたことでも、何かで読んだことでも、それが私の生活感情に強くふれ、自分にとって痛切に感じられることは、私の経験の中に含める。

生活感情に強く触れ、痛切に感じた「経験」から創作を出発させるという確固たる表明である。亀井勝一郎・上林暁との鼎談⁽⁸⁾でも「すべての文学は人間記録^{ヒューマンレコード}だという考えが根本にある」と言い切っている。実際、庄野は初期の頃から日々の生活の中で自分が実感した「経験」を書いてきた。ここで「聞いたこと」「読んだこと」を「私の経験」に含めるとわざわざ確認していることは重要である。直接経験したことに対して副次的な経験として位置づけているわけでは決していない。「聞いたこと」「読んだこと」とは換言すれば「私の経験」に対して「他者の経験」ということであり、自分の生活感情に強く触れれば、それは「私の経験」でもあると言っているのである。

要するに「聞き書き小説」とは、移り変わる季節や時代の中で人が生きる姿やその生活を描くことを課題にする庄

野にとつて、自分の経験だけに留まらず、積極的に他者の経験に触れ、その生活の豊かさを味わおうとする試みと言えるだろう。こうした試みの触手を大胆に伸ばした作品が「紺野機業場」である。

二 「紺野機業場」の形式

では「紺野機業場」の形式の特徴について具体的に分析していこう。

(1) 加工された会話体

まず文体に関してである。この小説は、語り手の「私」が計三回紺野家に泊まって取材し、紺野家の居間などで主人の紺野友次から話を聞くという設定である。もちろん聞いた素材をそのまま使っているわけではない。かなり庄野なりの巧妙な加工が施されていると言っていいたいだろう。その意味で友次のそれではなく、明らかに庄野の文体によって虚構化されている。

居間でのインタビュー場面の描写から友次の話す会話文の世界へと移行し、読者は自然な流れでそこに吸い込まれていく。大部分が友次の話している形を取るが、鉤括弧をつける場合とつけない場合、常体と敬体、標準語と方言を絶妙な配分で混在させ、独特なリズムを作り出している。もちろん適宜、加筆削除なども行われているだろう。

(2) 断片性と配列の作為性

さて注目すべきは断片的な話を組み合わせる配列の妙である。そのあり方はパッチワークに似ている。一つ一つのパッチ（布切れ）がそれぞれの色合いを持って存在しており、確たる中心があるわけではない。しかもその色合いは他の色合いによって微妙な陰影を帯びる。これは庄野の多くの作品が持つ特徴であるが、「紺野機業場」の断片

性は極まっている。話がアトランダムに羅列されている印象を与える。描かれる時代がタイムトラベルのように振り幅大きく行ったり来たりする。話題も行きつ戻りつし、同じ話題が再度出て来る箇所もある。

庄野は単行本のあとがきで「聞き手の人間がその町へ訪ねて行く度に、いろんな話を順不同に書きとめるといふ形にしたい。」と述べている。しかし、これはそのまま無作為に提出したということではなく、順不同に書きとめる自然な味わいを出したいということであって、実際には聞いた順に並べたのではなく、再構成されていると思われる。瀬沼茂樹の「無構成の散漫さをえらんでいる。」という評であったり、福永武彦の「羅列的に書いて、いったい何を言いたいのだろうか」「羅列された人生にも多少の濃淡というか、アクセントの強弱があつて、もう少し小説的な起伏に富んでもよかるう」という評^⑩は皮肉にも庄野の意図が適っている傍証と言えるかもしれない。

(3) 第二章の構成

従来の小説の枠組みから外れた、この構成について全二十章ある中の、第二章を例として取り上げ、話の配列の仕方を具体的に見てみることにしよう。場面ごとに番号を振り、友次の語り(回想)ではなく、「私」が取材している場面は番号をゴシック体で表した。第二章は、①工場と同じ棟にある居間で「私」が紺野友次夫妻と初対面の挨拶をする場面から始まる(昭40頃)。その後、風呂が沸くまでの間、さっそく囲炉裏のある居間で友次から安宅の歴史を聞くこととなる。

②日露戦争の時、子どもだった友次が父親に連れられて、小松駅にロシア人の捕虜や兵士の凱旋などを見に行った思い出話(明37頃)を皮切りに③安宅が「小まはり船」(小型廻船)の港町として栄えた頃の話(明治前半)に移る。北海道から出雲あたりまで荷を運ぶ話、船の神様である関の明神に対する信仰の話、その祭神である恵比寿の伝説の話と続く。次に④安宅に鉄道を敷く計画が起こり、田を守るために反対運動(明30頃)が起こる話になる。陳情が成功、安宅が小松に変更になったものの、それが皮肉にも町の衰微の原因ともなる。鉄道の普及によって海運は下

火になっていく。町は海運に代わるものが必要となる。そこで⑤秋本亮太郎という男の物語になる。秋本は海運業に代わるものとして織物業を始めた(明35頃)。こうした趨勢の中、多くの人が船を売り、機屋に変わった。その資金源を確保するために秋本が機業の組合を作った。

ここまで話が進んだところで場面はインタビュ어의場所である居間に一旦切り替わる。⑥友次の妻が居間に来て、子どもの頃小回り船を見たという会話をするのだ(昭40頃)。やがて中断されていた秋本の話に戻る。⑦生糸が暴落し、機業の組合が破綻し、組合員たちは借金を背負い、秋本が恨まれる話(大6)の後、⑧紺野家の機業の話が挿入される。祖母が秋本より早い時期にささやかな機業を始めた(明35以前)。大工の父は手織の織機を作っていた。町の機業とは系統が違うので、組合の破綻の被害もなかった。話は⑨秋本家のその後の話に戻る。組合はつぶれたが、秋本個人は共同経営者を見つけ、何とか工場を続けるが、やがて亡くなる(昭12頃)。秋本家は代替わりしたが、二代目には才覚がなく、結局没落して、二代目は備われの身になり、間もなく亡くなってしまふ。

さてここで場面は⑩語り手の「私」が紺野友次夫妻を初めて訪ねるために、小松駅を降りてから、紺野家にタクシーで向かう場面へと切り替わる(昭40頃)。つまり時系列としては①の初対面の挨拶の少し前に遡るわけである。

「私」に紺野友次を紹介した、次男の紺野悠二から事前に指示された、昔の風情を残すルートをタクシー運転手に告げるが、工事中で通れず、新しく舗装された道路を通って安宅の町に入る。そこで⑪古い道を通って紺野家を訪ねた、三年後(昭43頃)の車上に場面は切り替わる。川の堤を走る、狭くひっそりとした悪路ではあるが、夕方の車窓から見える田園風景に心惹かれ、安宅に行くのにはこちらの道が合っている気がする。この流れで「私」が工場周辺の様子を簡単に述べた後、友次の語りに戻り、長男の正明の話が始まる。⑫昨年(昭39頃)、大阪に住む正明の痛風が判明し、友次も息子と同じ大阪の病院で見てもらうことになり、そこから友次自身の痛風の話に展開する。⑬友次がはじめて痛風だと診断されたのは「ジェーン台風」の年(昭25)であった。入院したものの病院の対応が悪く、家に戻ってくる。その翌日にジェーン台風が襲来したということで、痛風の話はそっこので話題はすっかりジェーン

台風の話に移っていく。工場を建てて以来の大風に見舞われ、屋根が破損し、雨風が吹き込み、大変な騒ぎになった。

以上が第二章の梗概であるが、形式的に特徴のある点を挙げる。

(4) 往来する時系列

一点目として時系列が行きつ戻りつする点である。第二章を時系列で並べ換えてみると、③(明治前半)④(明30頃)⑧(明35以前)⑤(明35頃)②(明37頃)⑦(大6)⑨(昭12頃)⑬(昭25)⑫(昭39頃)⑩(昭40頃)①(昭40頃)⑥(昭40頃)⑪(昭43頃)となる。友次の語りの部分だけでも、おおよそ七十年ものスパンの中を時間が行きつ戻りつしていることが分かる。また「私」が取材している場面(番号をゴシック体で表してある)を取り出して見ても、①で始まり⑥と続くが、⑩では①を遡り、⑪では①の三年後に飛ぶという具合に時間が自由に往来している。時系列ではなく、内容ごとにまとまっているかという点と必ずしもそうでない。

(5) 話の複線化

二点目は話が複線化している点である。安宅の町の大まかな歴史(③④)のあと、町の歴史のなかに足跡を残す秋本家の歴史(⑤⑦⑨)が語られ、それと並行して紺野家の歴史(⑧)が語られる。それぞれが紺野友次の人生と交差しあいながら別の歴史として存在している。さらにそれらの背景には日本の近代史が流れている。前掲の書評で阪田寛夫は「脱線また脱線」と表現しているが、むしろ「複線」と言った方がよい。なぜならどの話も本線であり、脱線でないばかりか支線でもないからである。一見他人事である秋本家の末路の話は紺野家の話と同様の存在感を持っている。痛風の話(⑫)がいつの間にかジェーン台風の話(⑬)に取って代わる、その二者の関係も同様である。

(6) 重複と繰り返し

三点目は話の重複や繰り返しがしばしば見られることだ。②で友次が父親と小松駅に行った思い出話があった後、④で小松駅が敷設される話が出る。③の小回り船の話は⑥でもう一度出て来る。また取材場面も①で友次夫婦に初めて会う場面があり、⑩でそこに向かう場面が描かれる。こうした重複や繰り返しは章の中だけではない。たとえば次の痛風の話は、その後、第六章でも詳しく出て来る。痛風の症状はジェーン台風の二十年前(昭5)に既に表れていた(その頃はリウマチだと思っていた)ということを読者は知る。お灸を据えてもらったり薬を飲んだりしながら難儀をして過ごしたことが描かれるが、同時にその背景として、子どもの誕生、養父の他界などの家庭の出来事や「支那事変」「大東亜戦争」「大政翼賛会」「学徒動員」「終戦」「玉音放送」などの歴史的体験が描かれる。また明治二十九年と昭和九年の手取川の大洪水で紺野家が被害を受けた様子が「複線」として語られる。第七章でも痛風の話が出て来る。第六章の最後に「私」は安宅から帰り、その三年後に二度目の訪問をした時(昭43頃)に友次から聞く。この三年の間に友次は痛風の手術をしたり、その後長い間入院を繰り返したりしていたという。つまり第二章で長男が痛風になった折に、友次も大阪の病院に行った続きの話である。時系列で言えば、痛風の話は、第六章の痛風の部分(昭5↪昭20)↓第二章の⑬(昭25)↓第二章の⑫(昭39頃)↓第七章の痛風の部分(昭42↪43頃)という順序となり、パズルが埋まったことになる。また⑧の「機業場をはじめたばあさん」(友次の義理の祖母)は第四章でも出て来て、詳しく述べられるし、後半の章ではこの祖母の弟の一族(紺野家の本家に当たる)の消息がかなりの分量語られる中にも登場する。

(7) 未整理の構成の効果

以上のように「紺野機業場」の叙述法は、時系列が行き来し、話の中心が定まらず複線化し、しばしば重複や繰り返しもあるため、未整理のまま無作為に提示された印象を与える。しかし同時に未整理ゆえの効果も表れている。例

えば、第二章の⑩「初めて「私」が安宅に向かう場面」は、時系列的には本来①「安宅に着き紺野夫妻に出会う場面」の前にあるのが普通だが、あえて①から始め、安宅の様子や歴史を先に述べ、安宅のイメージを読者に思い浮かべさせることによって⑩の「新しく舗装された道路を通るルートで安宅に向かう場面」と⑪「三年後に昔の風情を残すルートで安宅に向かう場面」の街並みの対比がより味わい深いものとなっている。仮に時系列に従って⑩が①の前にあつたら⑩は①に従属する説明的な場面としか感じられなかったのではないか。

また第二章は焦点が定まらない印象を与えるが、同時に叙述の整理のために様々なものを捨象していくのではなく、一元化せずに縦横無数の糸によって織りなされる歴史のあり方を感じさせる。日本の歴史、安宅町の歴史、紺野家の歴史、秋本家の歴史は並行しながら、互いに密接に繋がりが合つてもいる。

さらに同じ話題が再び出て来て冗長な印象を受けることについても、その半面、読者は既に知っている話題にすぐに興味を喚起され、それに関連する、未だ知らぬ新しい事実を知ることとさらに興味が広がるという効果がある。第二章において友次の痛風の話に関して既に予備知識がある読者は、第六章で再びその話題に触れ、症状が二十年前からあつたことに興味を覚える。第七章ではその現状に関心を寄せることになる。また「紺野機業場」には友次の親戚が数多く出て来る。例えば第四章で友次のいとこの紺野芳松（紺野の本家の当主）の話があり、第五章では「私」と友次が散歩しているときに出会った男が芳松の弟・留吉であることが明かされ、その留吉の履歴の話に展開する。第十七章では留吉のその後の話が出て来る。第十八章では芳松と留吉の若い頃の話題に触れた後、芳松の兄の弘蔵の話になる。読者はここで芳松に兄がいたことを初めて知るのである。弘蔵の履歴を中心に芳松や留吉との関係性やなぜ長男の弘蔵が当主でないのかの事情も明かされる。その後弘蔵の長男新治の就職や結婚を友次が世話した話へと展開していく。このように既知の話題を足がかりに次々に未知の話題が始まっていくところに面白さがある。

三 「紺野機業場」の形式と『徒然草』

二八

第二章を例に「紺野機業場」の形式の特徴を具体的に見てきた。このような特徴は他の聞き書き小説にも多少見られることだが、ここまで大胆な挑戦がなされたのには庄野のどんな意図があったのだろうか。冒頭に掲げたように、そこには『徒然草』の影響があったと考えられる。

庄野潤三は形式面においても思想面においても庄野なりに『徒然草』を受容し、自らの作品に取り入れていった。特に昭和四十年前後は『徒然草』に関する庄野の言説も多く、この頃『徒然草』が庄野の念頭にしばしば上っていたことが覗える。ここで注目したいのは「紺野機業場」と同時期に庄野が発表した「世間話のたのしさ——私と徒然草」（『国語通信』、昭44・11）である。『徒然草』において兼好が聞き集めた「世間話」とその取材能力に着目したエッセイである。庄野は『徒然草』の多くの章段を「世間話」と捉えている。「世間話」とは『徒然草』の中でも思想的な章段ではなく「滑稽味のある話、珍しい話、話の中にも入らないくらいの一種の心覚え、メモランダム」といった章段を指している。庄野は『徒然草』を読みたい気持ちにさせる魅力は「随所に入っているこういう世間話の面白さ」にあると言う。また「出家の身でありながら、万障繰り合せて、おかしい話、珍しい話を聞き込んで来て、書きとめる。それらの話はすべて具体的で、場景が目の前に浮ぶように書かれている。」といった取材の卓越さに瞠目する。しかも「来世のこともさることながら、いまの、この現実の、人間生活に対する好奇心が強い。」「ゴシップ好きである。」と兼好自身が話の種を見つけるのを楽しんでいると庄野は捉える。兼好自身はこのような「世間話」を「多くは無益の談なり」（第百六十四段）と批判していることに対して庄野は「しかし、無益の談が多いといっておきながら、そういう噂ばなしの中から兼好はいっぱい材料を拾っている。拾いかたがうまいといえばそれまでだが、油断のならない人である。」と兼好の反語的な心情を看破している。さらに兼好について次のように言う。

エッセイストであるが、短編小説を書ける人である。どこまでもエッセイで通しているけれども、短い短編小

説を読んだような心持ちになるのがいくつもある。

「紺野機業場」には紺野友次から取材した話を「世間話」と捉え、「世間話」を「小説化」する企図があったと考えられる。その企図を反映したのが「紺野機業場」のあの形式ではなかったか。当時、『徒然草』の中に「世間話としての面白さ」を見出すのと同様の視点が紺野友次への取材にもあったことは想像に難くない。実際、庄野は「紺野機業場」について「云はば炉辺閑話の積み重ねのやうなものである」と述べている¹³。また取材した頃を振り返って「小説（紺野機業場）は書き終ったが、安宅の言葉の抑揚がなつかしい。私は、もつとこの言葉を聞きたい。茶飲み話をいつまでも聞いていたい。」とも言っている¹⁴。

私たちが普段の生活の中で行っている世間話は、その時々で見聞きしたことや思い出したことを中心として、もちろん未整理のまま話されている。重複や蛇足があったり、飛躍があったり、要点が定まらなかつたりもする。むしろそこにこそ世間話の魅力があると行ってよい。例えば、ある人物の噂話には既に以前に聞かされた事実も含まれることもあるが、そこに新たな事実が加わり、展開していく。むしろ既知が興味を喚起させることも多い。一つ一つの話は断片的でありながら、様々な方向に広がりを見せたり、断片と断片が思わぬ形で繋がったりもする。そのような予測不能な展開が面白い。

このような世間話への親近感はもとも庄野の中にあつたものである。子どもの頃の読書体験について庄野は「子供は空想をよるこぶものだが、私は本当にこの世の中で、だれかが経験しているようなことを書いた話の方が好きであつた。そういう性質は変らないもので、いまにいたるまでずっとそうである。」「現実味のあるものでないと、心がそつちを向かない。」と語っている¹⁴。

またこうした志向は、自らが書く小説の形式に対する葛藤にも繋がっている。小説家として出発して間もない昭和二十八年に書いたエッセイ¹⁵で庄野は、「青年期の初めにおいて、私は決して小説好きな人間ではなかつた」こと、チャールズ・ラムなどのエッセイストへ傾倒していたこと、「そのころの私には、フィクションという言葉もロマン

という言葉も、何か馴染みにくいものがあつた。私は、すべて劇的なものに対してよそよそしかつた」ことを振り返った上で、小説を手がける現在もその性向があり、小説の方向性を暗中模索していることを吐露する。

この葛藤はおそらくラムのエッセイのように一つの場面の中に籠められた、人が生きる姿、そこに生まれる哀感やおかしみをいかに損なわず小説の中で描くかということであつたろう。また昭和三十六年の鼎談¹⁶では「私を離れてフィクションと称して血の通つていない人間に、流行の観念で色づけして小説を書きたいとは決して思わない。」とした上で、「エッセイのような小説があつていいし、小説のようなエッセイがあつていい」とジャンルの壁に拘るよりも人間を描くことが先ず重要だと述べる。さらに紺野友次への取材を始めた昭和四十年の対談¹⁷では「その作中人物とか主人公がひとりでに動き出すというのはどういう状態なのか、僕は実感としてまだわからない。人生を断片としてとらえるということが自分の性になつていて、断片でとらえた静止した形、静止した形で人間の姿のおかしみとか悲しさとか不思議さとかに惹かれて、それを小説にしようとするわけだ。」と自分の意思やテーマに従つて主人公の行動が割り出されるような小説のあり方に違和感を覚えている。このような断片への志向や聞く志向が高まつて、『徒然草』にも感じたような「世間話」の魅力を体現するような形式に挑戦するに至つたのではないか。

『徒然草』の創作のあり方をめぐつて次に挙げる、序段の短い一文がさまざまに議論されてきた。

徒然なるままに、日暮らし、硯に向かひて、心にうつりゆく由無し事を、そこはかとなく書き付くれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。¹⁸

『徒然草』は一般に通し読みをするよりも、そこを取り出して個々の章段単位で読むことが多いので目立ちにくいのだが、実際に全体を見渡してみると、兼好自身が序段で「心にうつりゆく由無し事を、そこはかとなく書き付くれば」とことわつた形式がより鮮明になってくる。庄野自身も「紺野機業場」の執筆時期と重なる昭和四十四年三月に吉田精一との対談¹⁹で「今度私も一回初めからしまいまで読んでみようと思ひまして、こういう機会にまた読んでみたら、ほんとうにたいへんな作品で、果してこれからのちにこれをこえるものを日本人の中から書く人が出てくるかど

うか、それは容易なことじゃないだろう、すばらしい作品だと思いました。」と通し読みによって改めて感銘を受けたことを発言している。周知のように『徒然草』を章段に区切って現在のような章段仕立てにしたのは後人であり、写本は兼好が切れ目無く断片を書き連ねたことを示している。一つの断片が「心にうつりゆく」何らかの連想によって次の断片を呼び込み、連なっている。従って『徒然草』全体に亘って似たような内容が重複することも多い。また以前述べられたことと一見全く正反対のことが述べられることもあるが、これはむしろ兼好の相対的な姿勢を示している。例えば、先ほどの吉田精一との対談では、第八段の「女の人の足」に対する「肉感的な書き方」に兼好の好色な面を感じ、「こういうところは、早く坊さんになれ」と矛盾するようですけれども、実は矛盾じゃなくて、いちばん人間らしい。人間らしいからこそ、『徒然草』が何百年たっても生命があると思うんですけどね。」と兼好の多面性を評価する。

兼好はいわゆる「随筆」を書いたのではない。『徒然草』は随筆という概念がまだない時代に形式に縛られず心に触れたことを自由に書き綴った、独特な「随筆」である。未整理はある意味、自由ということでもある。そこはかとなく書き付ける心境を「あやしうこそ物狂ほしけれ」と述懐するように、自由であるがゆえの、整理しきれない心の「もやもや」とか煩悶とかがあったのではないか。

こうした『徒然草』のあり方を荒木浩は次のように端的に整理している。²⁰⁾

独特の発想と筆致で、魅力的な随想が連鎖し、時に難解な仏教思想を解く。しかつめらしい教訓もちりばめられ、有職故実の些末にあくびをかみ殺していると、打って変わって、秀逸で辛辣な笑いや逸話に緩和される。

(中略) 叙述の意味を一つに決めつけようとすれば、たちまちするりと身をかわす。読者はいつも裏切られ、かさまの言説で手玉にとられる……。

「紺野機業場」の創作の際、『徒然草』のこのような自由奔放な叙述形式が庄野の念頭にあったと考えられる。

四 「紺野機業場」と世間話の面白さ

三二一

前章まで「紺野機業場」が『徒然草』から喚起された、「世間話」のような話のリズムや形式の魅力について考察してきたが、最後に内容面での面白さについて、いくつかの具体的な面を挙げて考察したい。

前掲のように庄野は『徒然草』の「滑稽味のある話、珍しい話、話の中にも入らないくらいの一種の心覚え、メモランダム」といった章段に特に「世間話の面白さ」を感じている。「滑稽味のある話」に関しては、前掲のエッセイ「世間話のたのしさ」で『徒然草』第百三十五段を一例として挙げて、その人らしい癖や失敗など人間味が感じられる逸話に魅力を感じることを述べている。庄野はこのような滑稽味を「おかしみ」という言葉でよく表現した。このような「おかしみ」のある話が「紺野機業場」には多く散りばめられている。

また「珍しい話、話の中にも入らないくらいの一種の心覚え、メモランダム」という点に関して、『徒然草』にはこうした有職故実や物事の由来に関する章段が意外と多い。こうした目立ちにくい章段に庄野が着目しているのは、人々が受け継いできたものの背後にある人の思いや考え方を大切する精神を庄野が持っているからである。この点も「紺野機業場」に反映されている。

このような特徴を背景とし、「紺野機業場」に特に際立った側面を二点挙げておきたい。

(一) 「紺野機業場」における信心

一点目は信心のようなものである。「紺野機業場」の登場人物は、商売、結婚、病気、いたる場面で神頼みをしたり神仏に進むべき道を探ねたりする。関の明神の波切り御幣、住吉神社、九万坊大権現などその対象も一つではない。生活の中にそれらの神や仏の存在をたつぷり溶け込ませている。

前掲の瀬沼茂樹の書評では「反時代的で土俗的なもの、古風な共同社会的な流儀」であり、「信心ということ以上

に功利性を持つているところがあり、これが日本人の「根」としての大事なもののか、土俗信仰の意義から考えても、にわかに同意しがたい点がある。」と否定的である。こうした意見も頷けないこともない。

しかし注意したいのは「紺野機業場」の人々にとって神仏は既に絶対的な存在ではなく、依存しているわけではないことである。第三章は家族が病気になった時、関の明神に祈ったという複数のエピソードで費やされるが、いずれも非科学的なものを妄信しているのではなく、先ず医者にかかり、医療の限界に関わる部分、つまり人智を越えたことに対して祈っているのである。友次の義母が腸チフスになり、医者に「これは七、八割は駄目だ」と見放されて後、「お医者さんがみんな揃って駄目だと云ふなら、ひとつお父つつあんが関の明神さまにお願ひしてみよう。」ということになる。人力の及ばざるところでも神の御加護があるという「波切り御幣」の封を切ってお払いをするという義母は快方に向かった。

その後、戦争の混乱期になり、俗事に紛れて御幣の封をし直さず、お礼詣りにも行かず、二十年が過ぎた。四男の康之が大病し、難しい手術に臨んだ時、父親の友次は次のように祈る。

出どころが悪ければ腹膜を起すといふのに、腐らずに癒着して居つたといふのが、関の明神さまの御加護と云へば云へる。いや、ご加護であつたに違ひない。

その時、わしは、

「どうか直るものなら直して下さい。今度こそお礼詣りに行きます。五千円持つて行きます」と心の中で誓つた。

神は人智を越えた大きな存在ではあるが、身近な存在であり、神様とて力の及ばないものがあることを紺野家の人々は認識している。しかしそのような不可視なものとのつながりによって、心慰められたり、支えられたりしながら生きていけるのもまた事実である。

神仏に進むべき道を探る場合も神仏にすべてを委ね、依存しているわけではない。第九章において、昭和八年に

義父が亡くなり、友次に商売の転機がやってくる話が出てくる。義父から親の代から受け継いだ織物をやってほしいと言われ、義父の遺志を継いで織物をするか、友次がその時やっていた莫産織機の製作をするか、それとも今まで通り両方やるかの選択を迫られる。迷った挙句、九万坊大権現にお伺いを立てる。「将来は織物だけにかためた方がいちばんよろしい」という返事で友次の心は決まる。また町で資産家として知られる家から長女に縁談が持ちかけられ、婚約をした際も神仏が関わって来る。婚約の噂が広がり、婚約相手の素行のことで方々から反対の声が上がる。長男や、昵懇にしていた巡査も反対し、住吉神社の神主も「神様にお伺いを立ててみた。そしたら神様、面白くないと仰言った」とわざわざ言ってくる。友次は思案の末に、九万坊大権現にお伺いを立て、「やめた方がいい」という返答を得、断る決断をした。どちらも先ず人智でよく考え、神仏との適度な距離を保ち、その迷いを消したり、悩みを軽減するために神仏をうまく利用している。それは功利的というより精神衛生の問題とも言える。また神仏と言っても多分に神主達の世間的な常識や知見による判断も入っており、村の長老の助言という側面も無きにも非ずだ。

このような信心を前時代的、非科学的だと切り捨てることは容易である。実際、このような風習の多くは失われている。安宅の報恩講が秋祭りとともに賑わいを見せ、若者の出会いの場でもあった思い出話が出てくるが、それも廃れてしまったことを友次は語る。しかし庄野が「紺野機業場」において提示しているのは、こうした宗教の形ではない。人智を越えた大いなるものの存在を意識し、そのつながりの中で生きてきた日本人の精神までが、その形と共に消え去ることに対して危惧し、そうした心を大切にしたい生活のあり方を示しているのである。

河上徹太郎が庄野の宗教心を覗わせるエピソードを語っている²¹⁾。河上が庄野一家と散歩をした時の話である。たまたま村の氏神の前へ通りかかり、庄野が拍手を打ってお辞儀をすると、家族もその後ろで並んで拜んだ。その姿に河上は面喰らってしまう。河上は「これに宗教的・思想的な意味をつけてはいけない。素直に庄野さん或ひは庄野一家の美しい情操の現れととらねばならぬ。ここに庄野文学の基調があるのだ。」と感想を述べ、その後、夫婦が神社を拝む場面を二か所、庄野の小説から引用している。河上也指摘するように、庄野が思い描く信心は、ある特定の宗教

や思想ではなく、時代を越えて人々が生活の中で大切に、生活を豊かに彩って来た祈りの心のようなものである。

(2) 嫁探し・婿探しの話

「紺野機業場」の後半、際立って嫁探しや婿探しの話が多くなるのも大きな特徴である。これには幾つかの理由が考えられる。一つにはこの時代、子供の結婚の面倒は親として重大な仕事であり関心事であったことを示している。友次が親戚から頼られ、顔が広く世話好きな人であったこともある。また庄野が友次の話からこのような話を多く取り入れたということもある。どの家の息子・娘が誰と結婚したかということは世間にとっても最大の関心事の一つであり、まさに「世間話」の典型と言える。特に「紺野機業場」の結婚にまつわる、それぞれのエピソードには多くの物語性が含みこまれている。縁の不思議さや運命のいたずら、時代背景、人とのつながり、本人や家族、周囲の人たちの、趣味や価値観、欲望、思惑など様々なものが映し出され、世間話の面白さを感じさせる。

例えば第十八章に出てくる、親戚の新治の嫁探しの話を挙げてみる。友次は義父の従弟の紺野弘蔵と親しくしていた。新治は弘蔵の長男である。友次は新治の就職の世話もしてやり、その頃大企業の神戸の工場で働いていた。そこへ縁談が持ち上がった。弘蔵の弟の留吉（新治の叔父）が、取引先の娘で郵便局に勤めている子がいて、器量もよく有能な子だから貰えと勧めて来た。留吉は「あんないいのを貰はんと馬鹿や」と憤慨するが、新治はどっちつかずの曖昧な態度を取っている。というのも、時局が切迫していた頃で神戸の工場に勤労奉仕に来ていた女学校の子に想いを寄せていたのである。新治が近しくしている工場の人事係の人もいい子だから貰えと勧めていた。やがて、新治も人事係も一度その娘を見に来てくれと言ってきた。

新治の両親（弘蔵夫婦）と一緒に来てくれと請われ、友次は神戸まで行くことになる。神戸で鼠が天井を駆けまわると、宿屋に泊まった晩、空襲があつて、危険な思いをする。明るる朝、工場に行くと、人事係に段取りを教

えられる。空襲警報による避難訓練の際、私に鉄兜を渡す子が嫁の候補者だから、その時に見て下さいと言うのだ。打合せ通り、その娘を見て、印象は悪くなかった。

その後、友次は新治の母に付き合わされ、明石にある、その娘の実家まで視察に行く。友次はその時を振り返って「なんであんな家だけ見に行つたんやらうか。」とつぶやき、インタビュー場所の居間にお茶を持ってきた友次の妻は「この人のところへは何でも云うて来んことは無いくらゐです。喧嘩しりや家へ来る。貧乏して破産しりや来る。就職から縁談から何でも頼んで来ます」と言う。

新治の結婚を巡って、本人、両親、親戚、職場の上司、友次などの思いや性格、関係性などが映し出される。また時代による影響も色濃い。勤労働員が新治と娘との出会いを呼び起こす縁には妙味があり、空襲警報の訓練が嫁の品定めのおかしみがある。まさに事実は小説よりも奇なりという感を与える。庄野はエッセイ「私の戦争文学」(『読売新聞』、昭39・8・25)のなかで「戦争というのはひと口に悲惨といってしまうのでは足りなくて、平和な時にはちよつと考えられない、いろんなおかしみや哀感のあることを生み出すのに都合のいい状況をつくる。真剣だから、そうなる。」と述べている。時代背景が個々の人間を翻弄するだけでなく、思わぬおかしみや哀感を生み出し、人生に味付けをしていることを指摘する。このように「紺野機業場」の嫁探し・婿探しの話も、人がさまざまな横のつながりや縦のつながりの中に位置し、その交差点で悲喜こもごもの感情を抱きながら豊かに生きていく姿を描いているのである。

五 おわりに

「紺野機業場」の最大の特徴はやはりその大胆な聞き書きの形式にある。それは庄野にとって一つの挑戦であった。その形式は庄野が『徒然草』に見出した「世間話」の語り口であり、庄野に「世間話」を小説化する意図があっ

たことを本稿では指摘した。

「紺野機業場」を『群像』に発表した直後、庄野はこの作品に関するインタビューに答えているが、その中でこの形式についてこう述べる。

「聞き書きという形式をとったのは、それが、この作品の内容に一番ふさわしい、と思ったからです。(中略)話がわき道にいつたり、同じことを二度繰り返したりというのも、そのほうが私には面白い。枝葉末節を切り捨て、人生の線をスツと引っぱるようなことより、このほうが面白味がある」

小説の形式はまさに紺野友次という一人の人間の人生に通じている。彼の人生は決して直線ではなく、紆余曲折があり、囃らずも飛び込んだ他人の人生にも自分ごとのように関わる。そこに彼の人生の豊かさがある。紺野友次ほどではないにせよ、誰の人生も一本の年譜に整理して語り尽くすことなどできない。

また庄野は書いているうちに「なつかしい日本人だな」「いままでの日本をささえてきた日本人の典型」を書いていく気がしてきたと語っている。この気持ちの裏には、人と人とのつながりや年中行事、風習などの地域とのつながりが枝葉末節として切り捨てられていること、そうした豊かさや面白さが失われていることへの思いが込められている。

現在インターネットによって瞬時に多くの人々と簡単につながることができる。つながりは量的にはむしろ増えているはずである。枝葉末節の情報も溢れている。しかし「紺野機業場」が伝えるものとは本質的に違っている。その違いを一言で言うことは難しいが、伊東静雄が庄野に伝えた「手のひらで自分からふれさすった人生の断片」であるかどうかの違いであろう。そしていま、ある意味つながりが容易になった時代に、従来の緊密で(時にはしがらみともなりうるが)、肌で感じることでつながりが逆減っていることも事実である。

いまを豊かにするつながりは、やはり手のひらで触れることのできる個性、具体性の中にあるものではないだろうか。バーチャルなりアリティではなく現実の自然、歴史、コミュニティの中にいるという確かな感覚が必要なので

はないか。

具体的で個別な場所、時代に生きる具体的で個別な日本人、例えば紺野友次は、ある意味、場所や時代に縛られた人間かもしれない。不合理な、古風な運命感を持った人間とも言える。しかし、その人生は現代人に大切な問いを投げかけているように思える。

注

- (1) 村手元樹「庄野潤三と徒然草」(『帝塚山派文学学会紀要第4号』、令2・3)
- (2) 庄野潤三「わが小説」(『朝日新聞』、昭37・1・24)
- (3) 阪田寛夫「庄野潤三ノート10」(『庄野潤三全集第四巻』、昭48・10)
- (4) 庄野潤三『ガンビア滞在記』あとがき(中央公論社、昭34・3)
- (5) 庄野潤三「二つの緑」(ちばぎん『ひまわり』、昭42・9)、庄野潤三「舞台再訪」(『朝日新聞』、昭43・2・23)、阪田寛夫「庄野潤三ノート15」(『庄野潤三全集第六巻』、昭48・12)を参照。
- (6) 阪田寛夫「庄野潤三ノート2」(『庄野潤三全集第一巻』、昭48・6)
- (7) 安岡章太郎「角川文庫版『プールサイド小景』解説」(昭31・1)
- (8) 庄野潤三・亀井勝一郎・上林暁「私小説は減びるか」(『群像』、昭36・3)
- (9) 庄野潤三「紺野機業場」あとがき(講談社、昭44・11)
- (10) 瀬沼茂樹「風変わりで散漫——日本人の根」探り新実験」(『信濃毎日新聞』、昭44・12)
- (11) 平野謙・福永武彦・三浦朱門「創作合評」(『群像』、昭44・10)
- (12) (9)に同じ。
- (13) 庄野潤三「海のそばの静かな町」(『中日新聞』、昭44・12・17)
- (14) 庄野潤三「私の古典」(『いけ花龍生』、昭41・2)
- (15) 庄野潤三「新人発言『経験的リアリティ』」(『東京新聞』、昭28・12・20)

- (16) (8)に同じ。
- (17) 庄野潤三・小島信夫「文学を求めて」(『新潮』、昭40・12)
- (18) 『徒然草』の本文は、島内裕子校訂『徒然草』(ちくま学芸文庫、平22・4)より引用した。
- (19) 庄野潤三・吉田精一「徒然草と現代」(『国文学解釈と教材の研究』、昭44・3)
- (20) 荒木浩『徒然草への途——中世びとの心とことば』(勉誠出版、平28・6)
- (21) 河上徹太郎『夕べの雲』の一家」(『庄野潤三全集第五卷』月報、昭48・11)
- (22) 庄野潤三へのインタビュー記事「戦前の日本人の典型を」(『東京新聞』「土曜訪問」、昭44・8・23)
- (23) この伊東の言葉は、庄野潤三「前途」(『群像』、昭43・8)の「小説といふのは、いまの話のやうなものです。空想の所産でもなく、また理念をあらはしたものでなく、手のひらで自分からふれさすつた人生の断片をずうつと書き綴つて行くものなのです」等に紹介されている。

“Konno Kigyozyo” in Shono Junzo’s “Kikigaki Syosetu” in Comparison with “Tsurezuregusa”

Motoki MURATE

“Konno Kigyozyo (紺野機業場)” is a Shono Junzo’s novel that was published in 1969. It is a kind of novels, what is called “Kikigaki Syosetu (聞き書き小説)”. “Kikigaki Syosetu” is the novel based on an interview with a person about his personal history and how he lives. After the 1960s Shono Junzo produced many “Kikigaki Syosetu”.

“Konno Kigyozyo” is the representative work of “Kikigaki Syosetu”. This novel’s contents are as follows. “I”, this novel’s narrator, go to a small country town named Ataka in Ishikawa Prefecture, having an interview with Konno Tomoji, who runs a small fabric factory about his personal history and how he lives.

“Konno Kigyozyo” has great features in terms of writing form. The story is fragmentary, redundant, often derailed, and repetitious. The point to understand this work lies in such a form. I will explore Shono’s intensions and effects of the form, and I will also consider the content deeply related to the form. It is the aim of this paper.

I think that this form is greatly influenced by “Tsurezuregusa (徒然草)”. Shono had loved reading “Tsurezuregusa” since he was young. When he was writing “Konno Kigyozyo”, he remarked that he thought the charm of “Tsurezuregusa” as the fun of “Sekenbanashi (世間話)”, something like small talks or gossips. I think that the form and content of “Konno Kigyozyo” can apply to those of “Sekenbanashi”.

Therefore I want to point out the charm of “Konno Kigyozyo” and explore the characteristics.